

## 7 伐採時における広葉樹種子のじか播きについて

千頭営林署 寸又製品事業所 基職 水 畑 白 司

### 1 目 的

当署では、昭和58年度から第4次地域施業計画において、広葉樹資源の確保、造林投資の効率化、獣害対策等から、新たにI-5皆用施業団が設定され、奥地天然林地域において天然更新による有用広葉樹の育成に努めているところである。



写真-1



写真-2 昭和53年に播き発芽し樹高は5 mに成長している。

また、当署では昭和59年度に一人ひとりが天然林施業についての認識を持つ目的から、「どんぐり3粒運動」を起し、各事業所等へ看板を掲げ、署、現場一体となって天然林施業に取り組んでいるが、製品生産事業に携わる者として、この運動を進めるにはどうしたらよいか考えた時、伐採するときは、実行区域全体を歩くことから、その際に種子を播いたらどのような結果が得られるかという観点に立ち取り組んだものである。

### 2 研究経過

最初に種子のじか播きをしたのは、昭和53年度である。樹種はブナ、ケヤキ、ミズナラ、センノキ、クリ、桐など利用価値の高い広葉樹が候補にあがったが、次の理由から桐を播くこととした。

- ① 需要が期待できること
- ② 獣害がないこと
- ③ 成長が早く、材価が高いこと
- ④ 種子の採取が容易であること

このことから、桐の種子を取り、標高1,000 m前後の林道法面、約5 kmにわたりじか播きをしたが、ほとんど発芽せず失敗に終り現在は3本が成育しているにすぎない。

その後、林道法面に桐を少しづつ播いてきたが、59年度に「どんぐり3粒運動」が始まり、その一環として広葉樹種子のじか播きを行うこととした。種子は桐に加えて、センノキ、ミズナラ、ヒノキなどを採取し林道法面、伐採跡地にじか播きをしたが、これもほとんど発芽せず失敗に終わった。これらの経験を次のように分析し、60年度に再び取り組むこととした。

#### (1) 実行結果の分析

- ア 桐は病害虫に弱いため、発芽しても消滅してしまうのではないか
  - イ 傾斜が急なために、種子が流失してしまうのではないか
  - ウ 種子が凍結して発芽しないのではないか
  - エ 野鳥や野ネズミなどに種子が食べられてしまうのではないか
  - オ 樹種の特性などについて、再度、勉強する必要はないか
- などの分析を行ない次の結果を得た

#### (2) 検討結果

- ア 樹種は桐とする
- イ じか播きは集伐前に行うこととする
- ウ 種子の保管は気温変化の少ない所とする
- エ じか播き場所は、桐の適地条件を把握して選定する

### 3 研究成果

種子は59年10月に採取し、気温変化の少ない自宅床下に保管した。



写真-3 種子を採取した母樹，標高約 1,100 m の林道端，樹令約 20 年。

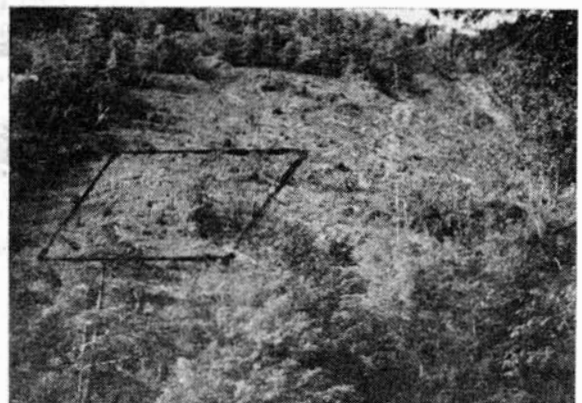


写真-4 発芽した林地，標高は約 1,300 m，傾斜約 25 度，土壤は排水の良い礫質壤土。

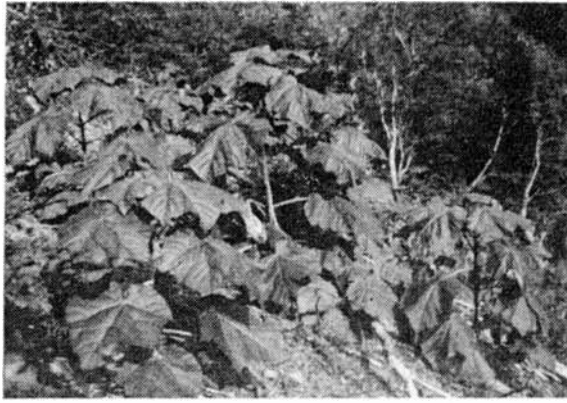


写真-5

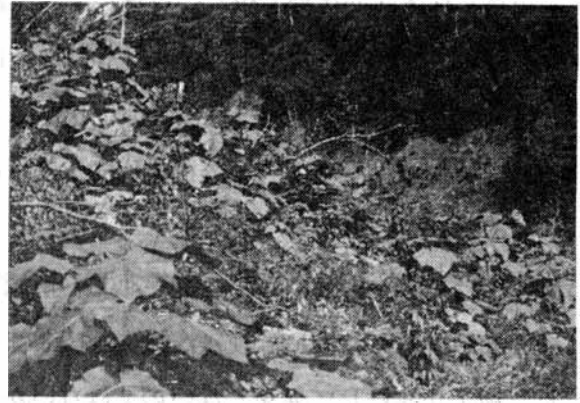


写真-6 良好な成育をしている林地の一部。

区域面積は約3.5 haであるが、実線で囲んだ部分約1 haにじか播きを実施した。桐栽培の成否は林地の選定に大きく左右されるとされており、伐採予定の3箇所を踏査し、より条件の良い所を設定した。また、山の向きは夏に日焼けしやすい西斜面を避け、風当りの弱い東、又は南面が最良とされているが、ここは南東向きの斜面となる。

じか播きは60年9月に行い、先山の伐採箇所に米袋に詰めた桐の種子を持ち運び、伐採する時に伐倒木の周囲に播き散らした。その後に集材を行ない、「枝条によるかき起こし」ができた。

じか播きした61年6月現地の確認をしたところ2~3 cmの稚樹が芽を出したが、病虫害の被害も心配されるので、1年間様子を見守ることとし、62年5月に再度確認したところ、写真-5のとおり順調な成育が認められた。

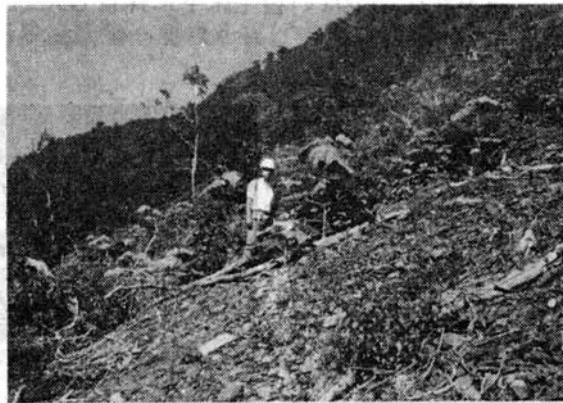
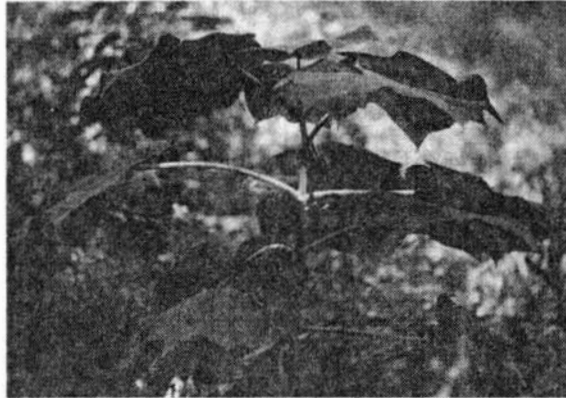


写真-7 標準地調査では、100 m<sup>2</sup>当り51本であるので、1 ha 当り約5,100本となる。樹高は小さいもので33 cm程度であるが、成育の良いものは、写真-7のとおり人の背丈ほどになっている。

#### 4 考 察

千頭山の将来にとって有用広葉樹を育成していかなければならないが、その桐について試行錯誤をくり返しながら、初期の目的である発芽を見ることができた。

しかし、桐は気候、地形、土質などの育成条件に対する要求度が高く、コウモリガ、キクイゾウムシ、カミキリムシなどの害虫の被害や、特に実生苗は立枯病、タンソ病の被害を受け易いと言われている。



写真－8

この桐を成林させるためには、いろいろな困難が予測されるが、今第一段階をクリアした所であり、今後の問題については、造林事業との連携をとりながら進めていきたいと考えている。

#### 5 ま と め

結果としては、今後の経過観察、保育の研究の余地が残されているが、製品生産事業に携さわる職員が種子のじか播きに取り組んだことによって、天然林施業に関心を持ち、理解を深めることができた。これからは、桐以外の広葉樹についても取り組んでいきたいと考えている。

永年、製品生産事業に従事してきたが、今までの「伐って出せば我々の仕事は終りだ」という観念を捨て、他の事業との連携を図りながら、更に創意工夫をこらし、より良い仕事を進めていきたいと考えている。